

柏江の清流に臨んで嘉吉の昔を偲ぶ

高 木 嘉 吉

(顧問・佐伯市藤原区)

大友興廢記によれば、嘉吉年間には大内勢が豊後に侵入して、所々で合戦を繰返している。大内勢の主将を義隆としているが、それは誤で、義隆は嘉吉以前に死亡しているから、大内勢を指揮したのは教弘であろう。その大内勢の一隊数万人が、兵船三百余艘に乗じて、嘉吉元年八月上旬に柏江に侵入上陸した。

佐伯氏の家督は九代の惟世であったが、智謀に富んだ名将であった。惟世は宇山城に汐月佐渡守泥谷主水助を籠め置き、城下にわずかの小勢を出し、策の為武者色を悪く見せ、八百余控えさせた。大内勢はこれを見て、小勢なり。先ず軍神の血祭にせんと押しかかった。その時長良権現にひそんでいた三千余騎が横槍を入れ、宇山城及び城下の勢も旗色よく反撃した。大内勢は不意を打たれて柏江まで敗走したが、八幡山から五千人の勢が出て

柏江口に控えた。大内勢は逃げ場を失って、皆潮に追込まれて敗走した。かくて兵船三百余を討取った。なぜ大内勢が堅田に侵入したのかを考えてみたい。それには大友氏十二代の家督持直に登場してもらわねばならない。

持直は大友二十二代中の傑物である。大友大内両氏は博多港の商権をめぐって北九州で争ったが、永享三年(一四三一)六月二十八日、筑前萩原で大友持直・小忒満貞の連合軍は、大内盛見軍と戦って、大勝し、盛見を敗死させている。大内氏の持直に対する遺恨は深重である。当時の足利將軍は義教であったが、冷酷非情な人柄で、守護大名家の盛大なることを警戒し、干渉している。持直は家督を甥の親綱に譲ったが、親綱との仲がしっくり行かず不和となった。これは義教の待望の事態で、干渉が陰に陽に行われることになった。即ち親綱の家督

は認められたが、持直の所領所職はすべて剥奪してしま
った。

こうして持直を無力にしておいて、大内持世に持直の
討伐を命じた。持世軍は北九州に進撃、持直と戦ったが
孤立無援の持直は遂に敗れた。しかし、大内軍も持盛の
反逆等内紛があったので、持世は九州から撤退した。

此の間に持直は勢力を恢復し、府内に居た親綱を破っ
て大友館に収めた。しかし、大内持世は中国四国勢の応
援を得て再び豊後に入り、持直を破った。持直は姫ヶ嶽
に拠って抗戦した。持世は姫ヶ嶽を攻めたが、持直は地
理不案内の敵を難所に誘い、背後から攻めて大敗させた
持世は、今度は慎重に長囲の策をとったが、惟世をはじ
め佐伯水軍の支援があつて屈しなかった。惟世の妹が持
直に嫁していたので、二人は義兄弟の關係であつた。大
内氏は、持世の跡を教弘が継いだ、教弘は盛見の子供
であるから持直に対する恨みは深い。教弘は大兵を率い
て豊後に入り、親綱と協力して姫ヶ嶽を攻めたが、持直
は善戦してなかなか落ちない。一計を案じて、持直軍の
内部結束を乱す策をとった。持直軍・親綱軍と分れてい
るが、同じ大友一族だから親子兄弟で分れ分れになつて

いる者が多い。

田北親増は、持直について姫ヶ嶽に籠城していたが、
子供の宮徳丸は親綱について攻撃軍側にいた。持世は先
ず親増に目をつけ、所領所職の安堵をえさとし、持直に
勝ち目のないことを説いて降伏をすすめた。親増はなか
なか「うん」と言わなかったが、ついに承諾して姫ヶ嶽
を脱出した。親増の降伏が連鎖反応を起して、御手洗・
薬師寺等南海部郡の有力武士が相ついで姫ヶ嶽を脱出し
た。かくて、六月十一日の総攻撃で姫ヶ嶽は遂に落城し
た。持直は、その後も筑後あたりにひそんで、がん強な
抵抗運動を続けた。

以上は永享年間のことである。

永享は十二年で終わって嘉吉になる。此の頃豊後には
大内教弘が進出して、大友親綱と共に持直の残党狩りを
行っていたが、その一環として、大内勢の柏江侵入が行
われた。教弘にとっては、持直は不具戴天の敵である。
惟世が姫ヶ嶽の合戦に持直を助けたこともしやくにさわ
ることである。惟世の本拠佐伯を襲えば持直も誘い出さ
れて出てくるかもしれない。一挙に二人を打破することも
出来ようと柏江侵入を計ったのであろう。持直は筑後に

交通安全地藏

宇目町小野市小藤旧日向道三叉路

あり、戦は大敗して志を果たせぬ結果となった。

嘉吉元年六月、將軍義教が赤松満佑に暗殺された時、大内持世もお伴して逃けたが、背中を斬られて負傷し、その傷がもとで遂に死亡した。持直にとって二人の強敵が相ついで死んだことは、痛快事であつたらう。

柏江橋上から堅田川の清流を望めば、水は語らず、惟世の颯爽たる武者振が浮かんで来る。



この地藏さんは、宇目町小野市小藤旧日向三叉路に立っているもので、造立されたのは、享保十三庚申天総高八十センチメートルのものである。

この道は、江戸時代から日向に通じる間道で、ここを旅する多くの人達が、このお地藏さんに、道中の安全を願って往来したものと思われる。今もとき折、山仕事に行く人が、季節の花を手向けてお参りするのだろう。真新しい花が、供えられているのを目にする。



写真並びに説明 軸丸 勇